
男子校×全寮制＝薔薇がさく
じゃじゃじゃーん！

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男子校×全寮制Ⅱ薔薇がさく

【作者名】

じゃじゃじゃじゃーん！

【あらすじ】

ただのBLです。

舞台は王道ですが、アンチ王道で脇役受け。

受けはノンケで地味美人。

攻めはガチホモの男前。

男子校×全寮制Ⅱ薔薇がさく 【設定】

【学園について】

しりつおうみがくえん
私立桜美学園

- ・全寮制の男子校 Ⅱゆえにゲイ・腐男子率が高い
- ・お金持ちのお坊ちゃま校 Ⅱ裕福な家の子か、相当の学力じゃないと入れない

～クラス分け～

- A・・裕福な家で、頭もよい
- B・・裕福な家または頭がよい
- C・・芸術・武術などに長けている特待生
- D・・素行がよくない問題児クラス

～補足事項～

- ・生徒会は全校生徒の投票で定める
- ・委員会またはクラブ、どちらか一方には必ず入ること。両方でも良い。

- ・親衛隊は本人の許可が必要（ファンクラブは本人の迷惑にならない限り、活動してよい）

【キャラクター（随時更新）】

- ・朝比奈伊吹 あさひな いぶき 高校生1ーB
- 図書委員会所属・書道部 親衛隊あり 大物書道家の一人息子

関西人で関西弁

品行方正で礼儀正しいが、普段は無邪気でタチ・ネコ両方に人気
容姿は美人だが、雰囲気は落ち着いてるからか地味 普段着は和
服

・桐生優真 きりゆうゆうま 高校生1ーA

体育委員会所属・弓道部 親衛隊あり 金持ち財閥の末っ子

容姿は男前でけっこうムキムキ 背が高い

見た目に反して、恋愛は奥手でピュア 伊吹に一目惚れした

・藤原歩 ふじわらあゆむ 22歳・寮長

伊吹に惚れて、じりじりと距離を縮める策士。

容姿は色気のある甘いマスクで人気だが、体格がひょろいことを
気にしている。

・椎名日向 しいな ひなた 高校生1ーB

美化委員会所属・園芸部 親衛隊あり 大手のおもちゃ会社の息

子

天使のような見た目とは逆に、時々男前な発言をする。

伊吹のことを可愛がっている同室者。

・一条翼 いちじょう ひとて 高校生1ーB

体育委員会所属・陸上部 ファンクラブあり 普通にお金持ちの

出

爽やか系イケメンだが、結構ゆるくてノリがいい。

リーダーシップがあり、人に頼られることが多い。椎名の中学からの友達。

・香月羽衣 こうつきつひ 高校生1ーB

図書委員会所属・バレー部 頭の良さだけで高校に入学した

見た目はちっちゃくて小動物なのに、中身はドエスで策士のバリタチ。

伊吹のことが好きで好きでたまらない。

・緑川春途 みどりかると 高校生3ーA

図書委員会委員長

たれ目たれ眉で包容力バツグンの先輩。

後輩に甘えられたり頼られたりするのが役得。そんな後輩が可愛くてしょうがない。

・小嶋司 こじまつかさ 高校生2ーB

図書委員会副委員長

綺麗な顔立ちと、真面目な雰囲気のクールビューティー。

後輩を甘やかす委員長に代わってしっかり指導しているつもりだが、周りからするとやっぱ甘い。

男子校×全寮制Ⅱ薔薇がさく　【プロローグ】

〔side Ⅰ〕

俺は有名どころの書道家一族に生まれた。

物心がついたころから筆と墨を持つとった記憶がある。　嬉しいことがあった日も、嫌なことがあった日も、親父と祖父からはその気持ちを文字で表せと言われてきた。

俺自身、書道をする人は楽しかったし、その事を苦には思わなかった。

家に縛られてるとか自分の夢を追いたいとか、そんなん考え付きもしいひん。

だから、俺はずっとこの家で一生を送るんやろうと思ってた．．．のに

「なんで東京やねん．．．もうほんまに嫌や．．．」

なぜか俺は今、でっかい門の前におる。

数日前、めずらしく親父から呼び出されたかと思えば「東京の高校に行け」のたった一言。

あん時はさすがに落ち着けんかったし、イライラしたけど、俺の実家も一応は名が広まってる。

色んな金持ちから依頼がくることも珍しくない。

親父が言うには「今のうちから世を渡っていくために色んなこと

に慣れとけ」だそうや。

なんでも、その高校っていうんが金持ち校らしい。

俺も所作や礼儀はわきまえてるつもりやけど、確かに親父の言うとおりかもしれん。

今のうちに空気に慣れとかなあかん、そう思ってきたんやけど・・・。

「全寮制の男子校で、しかも山奥って・・・最悪やんかあ・・・」

東京駅からタクシーで移動し、山の上に行くまでを市バスで二時間・・・めっちゃ疲れたわ。

その道中、親父からもらったパンフレットに目を通すと「男子校」の三文字が書かれてた。

全寮制っていうんは知ってたけど、まさか全員男とは思ってなかった。

しかも今現在、門の開け方がわからんくって立ち往生している。

俺はすっかり疲労困憊してしまっていた。

しばらくつつ立っていると、門の中から警備員らしき人がこちらに向かって歩いてくるんが見えた。

「本日から転入される、朝比奈伊吹さんあさひな いぶきで間違えないでしょうか」

「はい、そうです」

「お待たせしてしまい、申し訳ない。門番兼案内役の片岡です」

片岡さんは俺のイントネーションがずれているんに、一瞬驚いていたが丁寧に学園案内をしてくれた。

「では、学園案内は大体これで終わりです。寮長の部屋に行って部屋の鍵をもらってください。その後のことは同室者が教えてくれるでしょう」

「はい、分かりました。案内してくださってありがとうございますでした」

俺がにっこり笑うと、片岡さんもきれいな笑顔を返してくれた。

「では失礼します」

ぺこりとお辞儀をする。これで完璧や。

それにしてもでかくて綺麗な校舎やったな。教室を覚えるんが大変そうやったけど、理事長と寮長の部屋は何回も確認したから、迷わず行けるやろ。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

伊吹が校舎に向かっていく後姿を見ながら、門番が「きれいな子だったな」とつぶやいていたのを、もちろん伊吹は知らない。

男子校×全寮制Ⅱ薔薇がさく 【第一話】

〔side 寮長〕

今日は転入生が来るらしい。

たしか書道で有名な朝比奈家のひとり息子だったはず。

可愛い子だったらいいのだが、朝比奈家の現当主がかなりの男前だったので望みは薄い。

まあ、どちらにしろ最近ずっと暇をしていたのだ。

寮長室には俺Ⅱ藤原歩ふじわらあゆむの顔が好きだとか言っていて、媚を売ってくる奴しか来ないし。

転入生を部屋に送って、鍵を渡すだけの簡単な仕事だが、いい暇つぶしにはなるだろう。

そんな事を考えながらソファで雑誌を読んでいると、扉から控えめなノック音がした。

これはビンゴだー！ーこれまでの経験上、雄雄しい奴らは基本的にノックなどせず勝手に入ってくる。

「はいはい」と言いながら腰を上げると「これは可愛い子ちゃんだな♪」と、どこかで確信しながら扉を開ける

「……………っ！」

固まってしまった。

白くてすべすべの肌に、二重の大きな目、ちょこんとした小さい鼻、特にぷっくらとした薄ピンクの唇に目がいく。

一つ一つのきれいなパーツが、ちょうどいい位置に配置されていて・・・思わず見蕩れてしまった。

なにより（身長差でただの必然だが）上目遣いがたまらない。

「あの、鍵をもらいに来たんですけど・・・」

「あ、ああ。理事長から聞いてるよ。えーっと、朝比奈伊吹くんだよね」

お得意の営業スマイルで動揺を隠すと、伊吹はその笑顔に安心したようで少し顔が緩んでいる。

こくこくと頷いて「はじめまして、朝比奈です。案内お願いします」と、ふんわりした笑顔が返された。

「へえ、伊吹くんって兵庫県出身なんだね。だからイントネーションが違うのか」

「え、やっぱり分かるんですか！？・・・ちょっと恥ずかしいです

／／／

他愛ない話をしながら廊下をすすむ。ほんの数分で、名前呼びを

okされて歩はご機嫌だ。

照れているのか、ほっぺたを朱に染めてうつむく伊吹を見て、思わずニヤつく口元をサッと手で覆う。

なにせ初めての一目惚れであり、同時に初恋なのだ。かっこ悪い顔を見せたくない。

今まで、学園のかなりの数の生徒を性欲処理として抱いてきたが、

それに恋心なんて1mmも無かった。

その大体が可愛い見た目をした男子だったが、伊吹は別格だ。

隣を歩く伊吹を見るだけできゅうきゅうする胸を抑える。この感覚が恋ならば、扉を開けたあの一瞬で伊吹に欲情してしまったらしい。

ゆっくり、じりじりと伊吹を攻めることに決めた歩は、今日一日で「名前呼び」という第1関門を突破した。

「……伊吹は名前呼びなんて特に気にしていなかったが、それだけで心底喜んでる歩は初心だった。両思いへの道のりはまだ長い。」

「801号室。ここが伊吹くんの部屋だよ」

「ここまで、わざわざありがとうございます。楽しかったです」
そう言ってこちらを見上げる伊吹に、思わず触りたくなったが理性でなんとか押し殺す。

「良かったら、また寮長室に遊びにきてね。お菓子でも用意しとくから」

「はい。じゃあ、また今度……」

部屋に入っていく伊吹に手を振りながら、また来た道に戻る。

「……ケーキでも常備しておくか」

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

{side 同室者}

ガチャッと玄関から、鍵をとす音がきこえた。

そういえば、今日は新しい転入生と同室になるんだった。

「お願いだから、ビン底眼鏡ともっさもさの鬘かつらだけは止めてくれよ」
同室者Ⅱ椎名日向しいな ひなたは、可愛い顔を嫌悪感で歪めた。

四月・入学式と同時に新しく転校してきた男の顔を思い出して「うええ」と舌を出した。

海外に仕事へ行っている理事長から、同室者に学園説明をしてくれと言われたので、寝転んでいたベッドから降りると自室を出る。

「「あ」」

目が合った瞬間、椎名は目を輝かせた。

「ぜんぜんビン底眼鏡じゃない！もさもさ鬘じゃない！ってか可愛いー！」

伊吹は伊吹で、ブロンドヘアで天使のような見た目の椎名に

「天使みたいや！めっちゃ可愛い！」

と、両者とも興奮していた。

二人が落ち着いたところでリビングに移動した。

「はじめまして、僕は椎名日向。椎名さんとか呼ばれるの嫌いだから、好きに呼んでね」

「じゃあ、しいちゃん！」

キラキラした目で即答する伊吹に、ぷっと笑う。

「あ、俺は朝比奈伊吹っていうねん。よろしく」

「じゃあ伊吹ね。関西人なの？」

それから話し込み始めた二人は、すっかり仲良くなった。

伊吹は、可愛い見た目に反して結構男前の椎名に悶え（←かわいい子好き）、椎名は伊吹の無邪気さにすっかり絆されていた。

「しいちゃんの髪の毛めっちゃ綺麗やなあ。かわいいわあ」

そう言いながら椎名の頭をさわっている。

「そう言う伊吹のが可愛いよ？目ぱっちりしてるし、まつげもくるんくるんじゃん」

そう言い返して伊吹の目元をなでる。

—————すっかり、小動物のじゃれあいになっていた。

「あ！理事長に学園説明をまかされてたんだ！　ちょうど夕食時だし、食堂で話すよ」

「わかった。じゃあ着替えななあ」

数分後、伊吹の和服姿を見て呆然とすることを椎名はまだ知らない。

【第一話】end

〔side 椎名〕

部屋から出てきた伊吹を見て、思わず目を丸くする。

藍色の着物を茶色い帯できゅっと巻いている。

話すとそんな事はなかったが、伊吹は大人びた雰囲気を持ち主なので、その落ち着いた色がしっくりくる。

「伊吹、その着物どうしたの・・・？」

「ああ、俺の私服って和服やから。実家で小さいころから着せられてたから、洋服は合わなくて」

「もしかして、伊吹の家ってあの書道で有名な？」

「もしかと思^{たず}い尋ねてみると、「そうやで」と、きょんとした顔で返された。」

「なるほどね。それにしても似合ってるね」

「そう言いながら伊吹の頬をなでて、くすりと笑う。」

「えへへ。ありがとお」

満面の笑みで照れる伊吹は、まるで飼い主に褒められた犬のようである。

椎名はなんとなく実家の犬を思い出しながら、伊吹の頭をなでた。

廊下に出ると、まだ5時頃だからか人は少なかった。

だが、大きな規模の親衛隊をもつ椎名と正体不明の和服美少年が、一人部屋のはずの椎名の部屋から出てきたら・・・

もちろん注目を浴びる。

「ねえ、あの子誰だろ？すごく美人じゃない？」

「うん。椎名様の友達かなあ・・・見たことないね」

「うわあ。俺、あの子すっげえ好みなんだけど」

心の中で「あゝあ、めんどくさい」と思う。伊吹のほうを見ると、困惑したように服の袖をつんつん引っ張られる。

「なあなあ、しいちゃん。俺たちめっちゃ見られてへん？ やっぱ和服はあかんのかなあ？」

伊吹が自身の着物をみおろして、しょんぼりしている。

なぜか伊吹を見ていると父性反応をくすぐられるな、と思いつつ安心させるために微笑む。

「大丈夫。みんな始めて見る伊吹がめずらしいだけだから」

「そっか、そうやな。ならええねんけど」

伊吹がホッとしたように笑うと、それを見た周りが悶えていたが伊吹に悪影響だと思い、さっさとその場を離れた。

＊

「ここが食堂だよ。僕は料理なんてできないから、大体ここを使ってる」

「おおお・・・。めっちゃ広いやん！なんか美味しそうな匂いするし」

食堂は夕方時だからだろう、ほとんどの席が空いている。

ちらほらと来ている生徒は談笑しながら楽しそうに食事している。

椎名がカウンターへ、周りをボーっと見渡している伊吹の手をひき連れて行く。

カウンターにはかっこいいウェイターの男性が、きれいな笑顔で立っていた。

「こんにちわ。本日のご注文はどういたしましょう？」

「僕はミートスパゲッティ。伊吹はどうする？」

「ううんと、和食なら何でもいいで」

「では、ミートスパゲッティと和食定食でよろしいでしょうか？」

「はい」

「では少々お待ちください」

二人は一番端っこの窓側へ移動した。

「しいちゃんしいちゃん、今のうちに学園説明っていうんしてや」

伊吹がぐてーんと机に突っ伏しながら、椎名の指先をいじっている。

「うん、そうだね。ちょっと驚くかもしれないけど、この学園にはゲイが多いんだ。ノンケなんて一割くらい」

「……えええええ！？……それほんま？」

「ほんとだよ。それでね、生徒たちから特に人気な子には《親衛隊》っていうものがあるんだ」

「しんえいたい？」

「簡単に言うと、アイドルのファンクラブみたいなものかな。ちなみに僕ももってるよ」

伊吹はすでについていけない、という風にぶるぶると首を振った。きっと伊吹にも近い将来つくられるだろうけど、と思ったがあえて何も言わなかった。

「だから、ゲイのカップルを見ても受け入れてあげること。」

親衛隊・特に生徒会の親衛隊は、過激な人が多くて、あまり近づく
といじめの対象になりかねないから気をつけること。 分かった？」

「うん。たぶん、大丈夫」

なんとなく理解できたようだ。

伊吹の頭をなでていると、急にバツと顔を上げた伊吹が椎名の手を
ぐいとひっぱった。

「それやったら、しいちゃんとおる俺はいじめられんの!？」

「え、それは大丈夫だと思うよ。僕の親衛隊は穏便派だから」
ホッとしたような伊吹ににっこりと笑いかける。

「それに、この学園はゲイとおなじくらい腐男子も多いし・・・」

ちらりと視線を斜め前の席に移すと、可愛いチワワ系からゴツイ体
格の奴までがこちらを見て、話し合っている。

「あの二人、超萌える!」

「椎名様が頭なでなでしてるよ!かわいい」

「かわいい×かわいいか・・・いいな」

・・・非常に喜んでらっしゃった。

しばらくすると、ウェイターのお兄さんが料理を運んできてくれた。

「ありがとうございます」と、伊吹が丁寧にお辞儀していた。

お兄さんは驚いていたが、すぐに嬉しそうにお礼を言っていた。

伊吹のことを弟のように接していた椎名だが、それを見て感心した。
そして自分も見習って礼をしたのだった。

――

【おまけ】 〔モブ・腐男子視点〕

「あ、しいちゃん。スパゲッティ一口ちょーだい！」
可愛い笑顔で、口を開く謎の和服美少年。しかも関西弁だ。
小さい口から赤い舌がちらちら見えていてエロ可愛い。

「しょうがないな、ほら。あーん」

椎名様がまるで愛しい子を見るような目で少年を見てらっしゃる・・・！
ここは楽園か！楽園なのか。ホモの神様ありがとう・・・！

「んん、おいしいわぁ。ここの食堂気に入った♪」

そう言う少年の口元の汚れをティッシュで拭ってあげる椎名様。

かわいい×かわいいとか新境地なんですけど！新しい扉が今ひらく、
なんつって。

「ほら伊吹、僕のあげたんだから、もちろんその卵焼きくれるよね？」

「ええー、これ最後にとったのにい」

不満そうに唇を突き出す伊吹くん（仮）に有無を言わさない笑顔の
椎名様。

しぶしぶと口元に差し出す伊吹くん（仮）と、それをばくりと食べる
椎名様。

ああ、私も萌えでおなががいっぱいだよ。

これからは、この二人に注目せねば・・・。

【第二話】
e
n
d

〔side 伊吹〕

1ーB 裕福な家の者か、頭がいい者のクラスだ。

裕福で頭がいい者はA組になるので、その両方はこのクラスには居ない。

だからか、B組にはプライドが高い奴はいないし、まとまりがあって仲の良いクラスだと思う。

そのB組に今日、新しく伊吹が転入生として入ってくる。

伊吹はかなり緊張していたし、クラスに馴染めなかったらどうしようとか言っていたが、その心配はないだろう。

実は四月と同時に、この学園に転向してきた者がいる。

たしか名前は、望月俊^{もちづきしゅん}。ビン底眼鏡にもさもさの鬘^{まげ}というダサイ奴。

自分勝手だしワガママで、1度でもしゃべったりしたら友達だと勘違いする幼稚な奴だ。

どうやら綺麗なものが好きらしく、今は美形な生徒会連中に夢中らしい。

生徒会の奴らも転校生を嫌がってるみたいだが、なんでも理事長の孫らしく無下^{むげ}に出来ないようだ。

そんな王道が来て、腐男子の奴らも最初は喜んでいたものの、リア

あー、めっちゃ緊張する！ 書道の大会よりも心臓バクバクいって
んねんけど！

でも、第一印象は大切やからとりあえず笑顔でおったら良いかな・・・。

「今日は転入生を紹介する。 朝比奈、入って来い」

緊張で体に入力が入るのを感じながら、なんでもない様な顔をしてド
アを開けた。

入った途端にしんと静まるクラスに、思わず止まりかけたが、なん
とか教壇の上に立つことができた。

もう無理やー！と思った直後、何故かクラス中の生徒が「やった
ー！」と叫び始める。

思わずポカーンとしていると、後ろのほうで椎名が手を振ってくれ
ているのに気づいた。

それに少しだけ肩の力が抜ける。

「おーい、静かにしろー。 朝比奈、自己紹介して」

いくらかクラスが静まり、どこかキラキラした目達に見つめられる。

「今日からB組になる朝比奈伊吹です。まだ学園に慣れてへんので、
いろいろ助けてくれると嬉しいです。よろしくお願いします」

安心したからか、自然と笑顔をつくれた。

その途端、クラス中の人が俯いてぶるぶるしていた。なんでやる？

「ちよっ、俺たち超幸運じゃね？」

「うんうん！すごい美人だし、なんか良さそうだよ」

「笑顔が可愛いね。ボクあの子の親衛隊ができたら入るーっと」
クラスメイトの声はごちゃ混ぜになって伊吹には届かなかったが、
なんとなく歓迎されているようでホッと胸をなで下ろしたのだった。

「朝比奈の席はあそこだ。おい、一条、今日1日は教科書とか見せてやってくれ」

「はいよ。朝比奈君、こっちこっち」

ちよいちよいと手を招かれて行った席は、椎名の斜め前だった。

イスを引いて座ったのを確認すると、担任の先生は「一時間目は学活で、副担任の西先生がきてくれるからなく」と言って教室を出て行った。

すると、ガタツと一斉にクラスメイトに囲まれる。

「ねえねえ、朝比奈君って関西から来たの？」

「かわいいね。恋人とか居る？」

「朝比奈君って昨日和服着てたよね！？」

いっぱい質問されて困っていると、横の席の一条君が「はいはい、質問は1人一個ずつね」と仕切ってくれて助かった。

緊張していたが、なんとかクラスに馴染めそうで良かった。

一時間目の予鈴が鳴ると、みんな満足そうに自分の席に帰っていった。

「朝比奈君、はじめまして。俺、一条翼いちじょうはつばね、よろしく」

一条君が爽やかな笑顔で自己紹介してくれた。

「よろしく。今さっきはほんまに助かったわあ。ありがとお」
手を握り返しながら苦笑した。

s b 三回くらい・・・

なんだそれ。

会うの楽しみ、っていうか俺の隣だろ？

もしかしたら椎名以上に仲良くなるかもねん（笑）

t o 一条

s b それこそ嘘だな

そんな事はないと願いたいが、懐くの早いからな。
でもうちの子はやらん。

t o 椎名

s b 何様僕様椎名様

うちの子ww

まあ期待しとくわ。 じゃあな

【第三話】 e n d

男子校×全寮制Ⅱ薔薇がさく 【第四話】

～side 伊吹～

副担任の西寛人先生は、一言で言うところ『癒し』っていう感じ。

見た感じは、フツメンで印象に残らないんやけど雰囲気は柔らかくて、柔和な笑顔が可愛い。

この学園には教員もイケメンが多いみたいやけど、そういう先生たちにも負けないくらい人気なんやって。

今は学活の時間で、委員会決めている。

「じゃあ、最初に委員長を決めたいんだけど、誰か立候補は居る？」

西先生がぐると皆を見回して言った。すると、眼鏡をかけた綺麗な姿勢の子が手を上げる。

まさに委員長って感じの子だ。

「安斎くんあんざいの他に立候補したい子はいる？」

皆がキョロキョロと周りを見渡して、誰も居ないことが分かって先生はチョークをその子に渡した。

「では、満場一致ということで、安斎君が委員長に決定しました。進行役を換わるね」

教壇に登った安斎君が、黒板に綺麗な字で委員会名を書いていく。風紀・美化・保健・体育・図書・文化・放送・飼育があるらしい。

「では、入りたい委員会があれば挙手をお願いします」

中には定員オーバーでじゃんけんをする委員会もあったが、案外ちゃくちゃくと決まっていた。

俺は図書委員会に、しいちゃんは美化委員会、いっちー（と、呼べと言われた）は体育委員会になった。

ちなみに俺と同じ委員会になったのは、香月羽衣くん。^{かつきうい}小柄で小動物っぽい。

かわいいものが好きな俺にとっては、明日にあるらしい委員会会議が楽しみになってきた。

委員会会議というのは、各委員会ごとに話し合ったり仕事をする日と教えてもらった。

明日は新しく一年生が入るため、それぞれの委員会でも紹介しあうらしい。

どうやら各委員会の委員長が「うちの子がいちばん！」という精神をお持ちらしく、委員会同士が集まると言い争いになるようだ。

予算の配分などでも揉めるしで、委員長以外の役員はお互いを慰めあっているとかいないとか。

そんな話を西先生が苦笑しながら説明してくれた。

「なんか面倒くさそうやなあ・・・」

「そうだな。中等部のときはそんな事無かったけど」

「いっちーは頬杖をつきながら、ボーっとしている。後ろを振り返ると、しいちゃんは寝ていた。」

二人とも授業をあまり聞いていないから、頭がよくないらしい。

周りに感化されてボケーっとしていると、チャイムが鳴り始めた。

「じゃあ、今日の授業はこれで終わりだからね。部活見学に行けるのはあと一週間だから」

西先生はそう言うとうと教室を出て行った。

「ねえ、今日は翼の部屋でごはん食べない？」

「俺はいいよ。ちょっと香月に聞いてくるわ」

椎名がかばんを整理しながら、質問すると一条が香月くんの方に歩いていった。

「なあなあ、いっちーって料理できんの？」

「うん。あいつん家、兄弟が多いから実家帰ったときに作ってたら上達したらしいよ」

「へえ、すごいな。でも、なんで香月くんなん？」

教室の端でしゃべっている二人を見ながら疑問に思っただけ聞いてみる。

「あの二人、同室だからね」

なるほどと思いつつ適当にしゃべっていると、二人がこちらに向かってきた。

「香月もいっしょで良いよな？」

香月くんの方を見ると、不安そうに俯いている。目線を合わせて、安心させるように笑うと、顔を真っ赤にして笑い返してくれた。

「僕はもちろんいいけど。伊吹もいいよね？」

「もちろん！なあなあ、羽衣ちゃんって呼んでいい？」

嫌がられても呼ぶけど、と思いつつも首を傾げると、ぶんぶんと言葉をくれた。

思わず「かわいいわぁ！」と叫びながら小さい体に抱きついた。

「なにに、椎名。もしかして嫉妬してんの？むふふ」

「違うよ。翼のほうこそ香月くん顔真っ赤だけど、悔しいんじゃない？なかなか懐いてくれなかったじゃん、香月くん」

椎名たちの半分冗談半分本気の言い合いは、「俺と羽衣ちゃん、肉じゃがが食べたいなあ」といって羽衣を抱きしめる伊吹の声で中断されたのだった。

――――

〔side 椎名〕 in 一条&香月の部屋

「朝比奈は料理できんの？」

翼が興味ありげに伊吹に聞くが、伊吹は浮かない顔をした。

「うーん。なんでか知らんけど、全部甘あくなんねなあ。食べれたもんじゃないで」

「じゃあ、料理できんのは俺だけかあ」

そうこう言っている間に、翼たちの部屋についた。

料理が出来ない3人は、キッチンの翼をよそに香月くんを挟んでソファに座る。

「羽衣ちゃんって、身長何センチなん？」

「あ、えっと、149センチ・・・かな」

「ちっちゃいなあ。でも20歳までは伸びるらしいし！まあ、俺的にはちっちゃいんが好きやけど」

自分の身長が嫌なのか、悲しそうな顔をする香月くんに、慌ててフオロ―している伊吹だが最後の一言で台無しである。

「しいちゃんは？俺とあんま変わらんやんな」

「僕は163だよ。伊吹は？」

「俺は165センチ。もう一年たっても1センチも伸びてないから、

170は無理やろうなあ」

あゝあ、と伊吹がため息を吐いてみせると

「だ、大丈夫だよ！いい、伊吹くん。僕だって伸びてないし・・・」

香月くんは伊吹に一目ぼれしたのか分からないが、どもり加減と顔の赤さがすごい。

しかもフォローしつつ、自分も落ち込んでしまっている。　　なんだ面白くて笑ってしまった。

*

～no side～

ごはんを食べ、伊吹と椎名が帰った後―――羽衣の部屋にて

「うわああ・・・どうしよう！伊吹くん可愛かったああ！！！」

昨日、伊吹を廊下で見たときに一目ぼれした羽衣は、今日1日だけで心臓がバクバクしていた。

まさか、自分と同室の一条が伊吹と友達になるとは思っておらず、委員会だけでも同じにならねばと思い、じゃんけんで必死に勝ち進んだというのに。

なんていう幸運だろう。

そう思い、羽衣はくすりと笑みを漏らす。

普段は大人しくて控えめな羽衣だが、実は策士のドエスであった。

といっても、伊吹の前では緊張してどもってしまうのは策略でも何でもないのだが。

「これから僕のことを、どんどん好きになってもらわないと・・・」

その様子を、扉の隙間からこっそり見ていた翼は、面白そうにニヤついた。

「これだから、こいつはいけ好かないんだよなあ」

心の中で

「向こうが懐かなかったんじゃないかって、俺が馴れ合わなかったんだよん」と、今日言い争っていた椎名に反論した翼だった。

まさか羽衣がタチだとは思っていない伊吹が驚く姿を想像して、翼はまた笑った。

【第四話】end

男子校×全寮制Ⅱ薔薇がさく 【第五話】

{ n o s i d e }

四月の中頃、一年生にとっては初めての委員会会議。

伊吹と羽衣は図書室にむかって歩いていった。そこが図書委員会の活動場所のようだ。

先ほど別れた椎名と一条も、それぞれの専門場所に行った。

「なんか緊張するなあ」

「そうだねっ。でも他の委員会より穏やからしいよ、図書委員会」

昨日は楽しみでしろうがなかった伊吹だが、いざ対面となると心臓がドキドキして鳴り止まない。

羽衣は伊吹というだけで心臓が破裂しそうなのだが、昨日に比べてどもらなくなったのは大きな進歩だ。

それでも頬はふんわり染まっていて、周りから見れば意識しまくっているのがバレバレなのだが。

他愛もない話をしながら歩いていると、案外すぐに目的地に着いてしまった。

ガラガラと音を立てながら扉を開ける。

中にはすでに一年生が何クラスか集まって、図書室の机に集まっていた。

「あ、ねえねえ。君たちも一年でしょ？ こっち来て」

その中心にいた男の子が手招きしてくる。羽衣の手首をきゅ、と

掴みながらその輪にはいっていく。

「なにになに？ 先輩とか来てへんの？」

伊吹が近づいていくと、ぼんやりしていた顔が露になって、可愛い男の子も男前な子も目を丸めた。

遠くにいると地味で、綺麗な顔がまったく分からなかったのだ。

輪の中心にいた男の子が、ハッとして仕切りなおす。

「そうなんだ。先輩達がまだ来てないから、ここで駄弁ってたんだ」

「委員会会議って何分からやっけ？」

「三十分だよ。みんなちょっと早かったね」

指差す時計を見ると、まだ二十分だった。

羽衣は恥ずかしそうに俯いているが、こっちは完全なるキャラ作りである。

伊吹が他の一年としゃべりだすと、他からは見えない絶妙な角度で、不機嫌そうに顔を歪めた。

（ちっ。楽しそうにしゃべりやがって……僕の伊吹くんなのにな）

自分の方も気にかけて欲しくて、伊吹の手首をきゅうっと握ってみる。

「んん？ 羽衣ちゃんもしゃべりたいん？ ごめんごめん、ほったらかしにして」

伊吹はそう言うと、自分の前にひとまわり小さい羽衣をひっぱると、後ろからぎゅうっと抱きしめる。

「この子、香月羽衣ちゃん。かわいいやろ」

「羽衣ちゃん？ よろしくね」

色んな人から頭をなでられて、不本意ではあったが恥ずかしそうに笑って見せた。

「「「かわいい」」」

「ちょっとちょっと！羽衣ちゃんは俺のなんやからなあ！」

そんな不毛な議論が繰り出されようとしたとき、図書室の扉がひらいた。

ピタリととまる一年生達に、二年生と三年生も固まる。

先輩側としては

図書委員会に入るくらいなのだからイスに座って静かに本でも読めるかと予想していたが、一年生全員がもみくちゃになっていたのだ、ビックリして固まったのだ。

「えーと、図書委員会を始めたいから、適当に座ってくれるかな？」
優しそうな声で、委員長らしき人物が声をかけたのをきっかけに、皆それぞれちらばる。

全員が席に着いたのを確認すると、その人が口を開いた。

「はじめまして、僕が図書委員会委員長の緑川春途みどりかるとです。よろしく
たれ目たれ眉でどこか頼りなく見えるが、落ち着いた雰囲気と安心
する声音で、どこか委員長らしい風格がある。

どんな先輩なのかとビクビクしていたが、期待通りの委員長で一年生は肩のちからを抜いた。

「こっちは副委員長の小嶋司こじまつかさくん」

真面目そうな雰囲気で、クールビューティーといった風貌だ。

それにもこやかな笑顔で幾分か和らいでいる。

「よろしくね。今日は二年生と三年生はもちろん、一年生にも簡単な自己紹介をしてもらうからね」

*

1 通り自己紹介が終わると、先輩たちはみんな満足したようだった。

「図書委員会の仕事は、図書室の管理と月1の本の整理。あとは定期的に皆でお昼を食べて親睦を深めたりとかもしてるかな」

「どうやら図書委員会は本当に穏やからしい。」

三年生は「あたらしい後輩とのピクニックは楽しみだね」とか言ってるし

二年生は「始めての後輩だぜ！？ぜったい愛でる！」とか言っている。

「じゃあ……」

委員長が声を発して、一年生は始めての仕事か？と緊張したのだが「委員会全部で集まる会議まで、まだ時間があるから、みんなでフルーツバスケットでもやろっか！」

とびっきりの笑顔でそう言われて、ぽかんとしたのだった。

【第五話】end

お知らせ

勉強を頑張ってる(？)蓮未です。

こんな腐った小説でも読んでくださる(素晴らしい心をもった)方がいるようなので、一応お知らせしておきます。

男薔薇の方は、蓮未が受験生なので、これから更新が遅くなるなあと思って「委員会編」を作ったのですが

このまま書いていくと、どんどんキャラクター数が増えていって、内容とかがごっちゃごちゃになってしまう感じが……。

委員会編を予定通りに進めると、美化委員会の先輩や体育委員会の先輩も登場させなくてはダメで、たぶん出したところで出番は無いと思うんです。

攻め候補の桐生君と王道主人公くんは、絶対に出したいキャラなので出しますが、委員会の先輩は図書委員会だけ登場させることにしました。

つぶやきにてアドバイスをいただいたのですが、『キャラクター1人1人に個性や役目があったら、キャラクター数が多くてもいいのでは』という意見をもらいました。

生徒会の人も出す予定ですが、生徒会長と副会長・書記と会計の4人は主人公とあまり接点を持たせられなさそうです。

もし、書いている途中に生徒会メンバーを出したいシーンが出てきたら出しますが、今のところ名前だけ出そうかなと思っています。

今のままでも充分、主人公総受けなのでこれ以上、伊吹に惚の字のキャラが出てきても鬱陶しいという蓮未の判断です。

生徒会メンバーの話が読みたかった・読みたいという方はごめんなさい。

もしメッセージや感想にて、その旨を伝えてもらえれば出来る限り検討してみます。

番外編などで実現できるかもです。

なので、委員会編は続きますが、各委員会（美化・体育）の話は書きません。

このまま各委員会を全部集めた、委員会会議に移ろうと思います。その前に番外編にて、図書委員会の話も書く予定ですので、upしてたらずひ読んであげてください。

あと最近、非会員の方からの感想も受け付けるようにしました。分からないことがあれば、いつでも教えてください。よろしく願います。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~5423

男子校×全寮制＝薔薇がさく

2013年11月18日 22時32分発行